

# 建設関連小説の紹介

当館所蔵の建設に関する小説の中から、近年に出版された作品を中心にをご紹介します。



## 2024年刊行



### 東京都同情塔

九段理江(著)／新潮社／2024年

小説の舞台は、ザハ・ハディドの新国立競技場案が実現した東京。その競技場と対峙するように、新たな高層の建造物が建てられる。その建造物は犯罪者たちを収容する巨大な施設だった。設計者である建築家の牧名沙羅は、建築、そして言葉についての思考を巡らせていく。生成AIによる文章を作中に使用していることでも話題になった。第170回芥川賞受賞作。

## 2023年刊行



### 天災ものがたり

門井慶喜(著)／講談社／2023年

直木賞作家の門井氏が、災害をテーマに手がけたオムニバス。門井氏は『家康、江戸を建てる』、『屋根をかける人』、『地中の星』など(いずれも当館所蔵)、建設をテーマにした小説を多く手がけていることで知られており、誰にでも理解できるよう簡便な表現を心がけて執筆されている。

本書でもその本領は発揮されており、武田信玄の信玄堤にはじまる総合的な治水システムについて、理解することが難しいこの全容を実にわかりやすく説明している。そのほか、三陸沖地震、寛喜二年大飢饉、宝永富士山噴火、明暦の大火、昭和38年裏日本豪雪の全6編は、宮沢賢治を父親の目からとらえた直木賞受賞作『銀河鉄道の父』のように、各編さまざまな立場の人物を登場させることによって、単に悲惨さを訴えるだけで終わらせない多角的に災害と向き合う作品となっている。

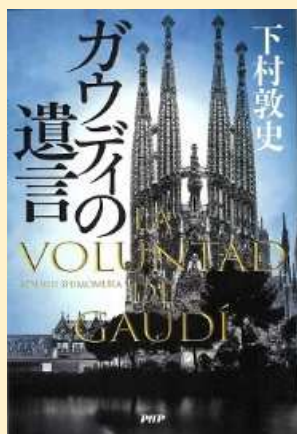


## 玉川上水傳

江戸を世界一の百万都市にした者たち(前・後編)

西野喬(著)／郁朋社／2023年

江戸の飲料水を確保するため、承応2年(1653)に開削された玉川上水。取水口から送水先までの約43キロの高低差が100メートル程という難工事を、幕府の命を受けた松平信綱や伊奈忠治、請け負った庄右衛門、清右衛門兄弟など、開削に携わった人々の姿を通じて描いた小説。



## ガウディの遺言

下村敦史(著)／PHP研究所／2023年

サグラダ・ファミリアの尖塔に、首を縛られた人間が吊るされた。被害者はサグラダ・ファミリアの模型職人アンヘル。佐々木志穂の父は彼の同僚の石工で、事件当日から行方不明となり、殺人容疑をかけられた。父の潔白を証明するために、志穂は奔走することになるが…。誰が何のために恐ろしい事件を起こしたのか。その真相にはガウディの残したという遺言が関わっており、それはサグラダ・ファミリア建設を根底から揺るがす危険をはらんでいた。



## トゥデイズ

長嶋有(著)／講談社／2023年

子育てのために、神奈川県の外にある築50年の7階建て、1～5号棟まである大型マンション「R グランハイツ」の一室を購入し、引っ越してきた家族を中心に、モダンな集合住宅に500世帯が入れ替わりながら集まり、住み続ける住人たちのそれぞれの暮らしぶりが描かれる。変化する時代のつながりやどこにでもある日常、かけがえのない日々が胸を打つ心温まる小説。



# 事故物件探偵

建築士・天木悟の執心（角川文庫）

皆藤黒助(著)／角川書店／2023年

若くして才能を認められ、横浜で天木建築設計を経営するイケメン建築士・天木悟と、天木にあこがれて横浜の大学に入学した織家紗奈のバディもの。天木はある理由から事故物件の心理的瑕疵を取り除くことに情熱を燃やし、靈感の持ち主である織家はそれを手伝うことになる。全四話＋エピローグのオムニバス。



# 自由の丘に、小屋をつくる

川内有緒(著)／新潮社／2023年

娘のために自分たちで小屋を建てたい…40代で母親になってそう考えた。本書は自分でも信じられないくらい手先が不器用で、洗濯物を畳むことすら苦手だった著者が、縁あって山梨県の集落で見つけた丘の上に小屋を作った6年間の記録である。土地探し、設計、施工、材料選びまで一から始めて、集まった仲間たちの手も借りて小屋づくりを進めていく。幼い娘の成長とともに、何年もの時間を経て形になっていく小さな家。セルフビルドを通して、生きるということの手応えを感じさせてくれる、読む者の心と価値観を揺さぶるものづくりドキュメンタリー作品。



# 地面師たちの戦争

帯広強奪戦線(宝島社文庫)

亀野仁(著)／宝島社／2023年

地面師とは、他人の土地を勝手に売り飛ばして金をせしめる詐欺師たちのことをいう。この物語の主人公の橘（偽名）は、陸上自衛隊特殊作戦群の一員だったが、ある病気に罹患したせいで職を追われる羽目となり、地面師に身を落とした。

2022 年刊行



## 地図と拳

小川哲(著)／集英社／2022 年

日露戦争開戦前夜、満洲の李家鎮（リージャジェンと読むらしい）という架空の街を舞台に、その地が炭鉱都市として発展し、第二次世界大戦終戦後の略奪と破壊によって廃墟となるまでを、国籍も立場も思惑も違う登場人物たちを通して描く。

全編を通じて登場する細川という狂言回しが、個々の人物のストーリーを繋ぎ、600pを超える大著を「地図」と「拳」を語る一つの物語へと導いていた。第168回直木賞、第13回山田風太郎賞受賞作。



## お客様のご要望は

設楽不動産営業日誌（朝日文庫）

水生大海(著)／朝日新聞出版／2022 年

不動産会社社員の設楽青年は、子供のころに誘拐された経験をもつが、身代金など要求されていないにもかかわらず、なぜか無事に解放されている。犯人の目的は何だったのか。その謎解きが本作のメインテーマだが、全四話のオムニバスでもあり、各話ごとの難題解決も独立して読める。



## カマキンとニュートリノ

～建物と対話する男たち～

春田尚(著)／文芸社／2022 年

本書の主人公は木造建築を主とする工務店の跡取り息子だったが、鎌倉近代美術館（略してカマキン）の意匠や内部空間にあこがれ、近代建築の設計士となる。しかし、設計ミスが原因で破産し、横浜の三溪園の清掃員となり、そこで園内に移築された素晴らしい木造建築の数々に魅了され、再起を図るというストーリー。



## 骨灰

冲方丁(著)／KADOKAWA／2022年

2015年、渋谷駅周辺再開発事業において、大手デベロッパーのIR部に所属する松永は、自社が手掛ける超高層ビル工事現場に関する不審なツイートの真偽を確かめるため、現地である地下工事現場へと調査に向かった。そこには異常に乾燥した空気と、骨が焼けるような異臭が蔓延しており、さらに現場深くに掘られた穴の底には、謎の男が鎖でつながれていた…。第169回直木賞候補作。



## 大河への道(河出文庫)

立川志の輔(著)／河出書房新社／2022年

立川志の輔の新作落語の小説版。千葉県香取市の市役所が観光振興策として、伊能忠敬をNHKの大河ドラマに売り込もうとする話で、この演目は人気があるらしく、中井貴一の主演で2022年に映画化もされた。



## 同潤会代官山 アパートメント(新潮文庫)

三上延(著)／新潮社／2022年

同潤会代官山アパートメントが、最新のモダンアパートだったころから、解体されて跡形もなくなった後までを、そこに暮らしたある家族と紡ぐ70年の物語。70年の間に、世代も建物もずいぶん変わるものだなあと、あらためて気づかされた。あたたかく、少しせつなくもなる穏やかな一冊。